

## 巨大災害に備えて

Preparation for Mega-Disaster

わが国は過去から様々な災禍に見舞われてきたが、災害対策基本法制定の契機となった1959年伊勢湾台風以降、昭和後半の30年間には大きな災害は少なく、この間に高度成長を遂げた。しかし、平成の30年間、2つの大震災をはじめ多くの災害に見舞われた。西日本では内陸直下の地震が頻発しており、南海トラフ地震発生との関連が懸念される。火山噴火も多発した。令和元年には、42年ぶりに名称が付いた2つの台風が上陸した。戦後、営々と進めてきた治水対策では、激甚化した近年の台風・豪雨には対処が難しくなってきた。このため、流域治水や立地適正化などの施策が議論されるようになった。こういった中、昨年来の新型コロナウイルスの流行で、新たな社会の在り方が模索されている。

人類の歴史は災禍との戦いでもある。世界史を紐解けば、14世紀半ばのヨーロッパでのペスト流行とルネサンスの芽生え、16世紀の新大陸発見と天然痘によるアステカ・インカ文明の終焉、1665年のロンドンでのペスト流行と翌年のロンドン大火によるニュートンの3大発見とイギリスの興隆、18世紀のリスボン大地震とラキ火山噴火によるポルトガル衰退やフランス革命、19世紀のスペイン風邪と第一次世界大戦の早期終結など、災禍と歴史の関係を感じる。

わが国も、天平時代や貞観時代を始め、感染症と自然災害が重なった時に大きな歴史の転期を迎えてきた。日本には元号が248あるが、約半数は災異改元による改元であり、災禍の多い国に住んでいることを実感する。中でも、南海トラフ地震発生時期には、西日本が地震の活動期を迎えるため、歴史の転換期と重なってきた。

技術士の多くは、安全に関わる業務に携わっている。中でも建設系の技術者は、自然災害から社

福和 伸夫

FUKUWA Nobuo



名古屋大学減災連携研究センター

教授、工学博士、構造設計一級建築士

1981年名古屋大学大学院修了後、清水建設、名古屋大学工学部、先端技術共同研究センター、環境学研究科を経て現職。専門は建築耐震工学・地震工学。

会を守る役割を担っている。国難とも言える南海トラフ地震や首都直下地震の発生が心配される中、安全を担う技術士の果たす役割は大きい。10年前、日本では起きないと言われていたM9の超巨大地震を前に、巨大津波、長周期地震動による高層ビルの揺れ、東京湾岸の液状化、タンク火災、帰宅困難、福島原発事故、計画停電、サプライチェーンの途絶などを目の当たりにした。「想定外」という言葉が氾濫する中、技術者は、見たくないことを見ていなかったことを反省したはずである。

しかし、この10年、事前復興計画は遅々として進まず、首都圏への一極集中が進み、災害危険の高い沿岸低地に高層ビルが建設され続けている。通信、電力、ガスの自由化が進み、ライフライン維持のための安全投資も難しくなっている。多大な債務の中、社会インフラの整備も遅滞している。2020年度中に耐震化率95%達成を閣議決定していたが、とん挫した。首都圏一極集中是正、国土強靱化、地方創生なども、掛け声倒れになっている。

Withコロナ、Postコロナが叫ばれる中、三密を避け、自助・共助・公助の力を結集し、縦割りを打破した対策が望まれている。孫子の格言「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」を思い出し、災害を正しく恐れ、社会の病巣を検知し早期に治癒することで、災害を未然に防ぐ必要がある。着眼大局着手小局の態度で、技術者が互いに本音を語り、問題の本質を見抜き、防災減災のため本気で実践したい。「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」である。技術者自らが率先市民として行動することで、「災い転じて福と為す」ことを実現し、日本の豊かな社会を持続発展させ、次世代にバトンタッチしたい。